

仮名：高橋さん

年齢：70代

性別：男女

問題：親子・薬物

「脱法ドラッグ、やめないわ」～ 措置入院中の娘が帰ってくる恐怖～

大阪から老夫婦が相談に。「娘に殺される。私の育て方が間違っていた」と泣き崩れる妻。うつむいたままの夫が話し始めた。

【娘を甘やかした結果】

「娘(仮名・京子)は現在 32 歳。かわいいひとり娘の京子に私どもが逆らったことはない。娘は大学を出てから長い間定職につかず、親の金で遊び暮らしていた。行く末が心配になった両親が、娘にやりたいことを訊くと「服を売りたい」と言う。希望どおり洋服を売ってお店と店のそばのマンションの部屋をひとつ買い与えた。しばらく京子は実家から遠ざかり親離れが成功したかに思えたが、いつの間にか「家事が面倒」とマンションを放置したまま、実家からお店に出るようになった。ある日妻は京子の部屋の机の上に、粉の入った茶色い壘を見つけた。心配する妻に向かって娘は『違法の薬じゃない。大丈夫。クラブで知人から買ったの』と平然と言いつつ放った。」

【脱法ドラッグから暴力へ】

脱法ドラッグは現時点で法の網から漏れているだけで、いずれは「指定薬物」になるものが大半、実際は麻薬だ。性的な快楽を増す目的のものや幻覚を生むもの、攻撃的になるものもある。アメリカで男が道路のホームレスの顔を食べてしまった事件も脱法ドラッグによる異常行動だ。ある日突然京子は「うざいんだよ。殺してやる」と母親になぐりかかった。それからというもの母への暴力や暴言が激しくなるばかりで、お店は他人に任せっきり。目の焦点が合わなかったりロレツがまわっていなかったりすることも増え、恐怖を感じた両親が警察に通報。京子は措置入院となった。白髪の父親が言う「それからというもの入院を繰り返しているんです。先日も見舞いに行きまして話しましたが『薬をやめる気はない』と娘に言われました。とりあえず一旦薬がぬければ病院から退院させられてしまいます。あと 1 週間で京子が出てきます。このままでは妻は殺されてしまうかもしれません。まずは同居をやめたいんです」

【「家を護る」選択のうえでの解決策】

「家を捨てる覚悟はありますか？」と私は訊いた。父は頷いた。母は言った「同居は嫌ですが住むところは変えたくありません」。こういう場合ご夫婦の足並みが揃っていれば解決は早いが今回は違う。ここでお二人の気持ちを合一させる時間はない。娘はすぐに外に出てくるのだ。「家を護る」という前提で私は話をはじめた。「実家にある娘の荷物を空きマンションに入れること。大切なのはひとつ残らず移動させることだ。実家に戻ってくる口実を失くすために。次に『実家には一切出入りを禁ずる』通告書を入院中の京子に渡すこと。娘の意見など聞く必要はない」そして住民票をマンションに移すこと、鍵の交換、セキュリティ会社に登録し、娘の「不法侵入」に備えることなどを伝え「今すぐにはじめる」よう促した。いつの間にか母の涙は消えていた。

【ここが POINT】

親に依存しつづけ暴力をふるう子を自立させる治療法は？ 家も財産も売却、駆け込み寺のパンフレットを置いて(加害者への対応あり) 逃げるのがベスト。一旦離れて暮らすことで親子が冷静に状況や関係を俯瞰できるようになる。上記のケースは「家を護る」前提での作戦だ。たとえば娘が金に困っている場合、借用書を交わしてから貸すことも重要だ。断固たる親の態度が娘を変える。

薬物依存からの脱却は、本人の意思と専門医療機関、自助グループや周囲のサポートがあって可能。今回の場合は前提となる「本人の意思」が欠如している。それを促す第一歩として、かつ家族間での悲劇が起らないよう、まず「ご両親の避難」をアドバイスした。娘が自立や薬物依存からの脱却への相談に駆け込み寺に来るようになれば、問題の解決は近い。



● 駆け込み寺は会費、寄付、助成金で運営されています。画像は毎月募金箱を持ってきてくださる RIKIYA さん。いつも有難うございます。●